



植物標本との対話

村山良子

「仲間になりませんか」と男性二人に誘われ、今ペンを執る一因となる私がおります。

宗谷における湿原の激減に心を痛めたその一人が胸中を会報No.八十六に吐露していますが、彼はそれを見る事なく倒れ、意識を回復せぬまま一年後に逝かれたのです。

道内各地で採集した植物標本はダンボール十二個にもなりますが、奥様には七十歳になったら整理をすると言うのが口癖だったそうです。その計画が実行できず心残りであったろうことは一年間の闘病が物語っている様に感じたのです。山野井瑞穂氏享年六十九歳。

保護を振り翳すつもりはないけれど、せめて複数になって働き蟻になりたいとの意志を同じくする身として、後に従うつもりが突然一人残されてしまいました。

「クランベリーに寄せて」と題した一文を遺言と受け、私なりに故人の財産を生かすべく長年眠っていた箱の蓋を開け、今植物標本の整理を、町教育委員会の理解の元で勝手連のようにはじめております。

鳥見人として眺めているうちに、食物連鎖を考える時、すべてが地球規模で見つめなければならぬことは自明の理。そうしているうちに喜怒哀楽で身が肥大してきます。

花は愛でるだけで、種類の多さに避けて通っておりません。ルーベでのぞいて比較しても、検索の言っている事柄が理解できない初心者ですから、几帳面な故人の表記に則りただひたすら事務的に標本を処理しようとするのです。しかし学名の意味も解らずに写し取るのも悔しい。が慣れぬラテン語がやると読めたアヤメやユリ科等に安堵し、言語の源がここにあるのかと感心したり、何処かで聞いたような名に逢う不思議を楽しんでいきます。

それでも故人や本により種類の仕方や順序に多少の違いを見つけ、故人を尊重して進めていますが疑問が沸き出て滞ることしばしばです。納得できるように植物用語の図解など一から始め、フィールドに出て観る事が先決なのに、頭の中は植物の名で溢れ、野の花や雑草といわれるも

のと対峙していないもどかしさがあります。

江別のM氏にナガバノモウセンゴケ(一九七三年に採集)があった場所は何処かと尋ねられても、北見別幌川沿いに広がっていたであろう高層湿原の証であるこの存在を、私をはじめ枝幸町民がどの程度把握しているのでしょうか。きっと湿原があったことすら忘れられていると思うのです。

最後に残ったと思われるその切れ端が、市街地にパンを繁殖させ、道々を横断するクイナの親子を育てていましたが、埋め立てという現実にもう見ることは出来ません。

嫁いで来た時には未だ目立たぬ豊かな実りがあったと思うと残念です。その後故人の嘆きが次第に増しているのに何も見えず知らずに過ごした時を戻すことはできませんが、せめて故人が標本を通して、私に植物の難しさや楽しさを教えて下さっているように、この仕事を通して得たものを自分なりにアレンジしながら観察会の子供達に伝える事が私の役目かなと感じております。

『自然ウォッチング』月一回の町の行事に、正に自然の中で遊び、体験や観察を何とか続けようと案内人をして三年になり、今年は十一ヶ月間工夫してみました。小学校教諭と



して豊かな経験と知識を持つ山野井氏を失い、戦力ダウンも甚だしいのですが、暗中模索の私達が、美しい生命、大切な地球を守る努力を惜しまず、次世代へバトンタッチしなければなりません。子供達の琴線に触れるような機会を沢山つくってやりたいと思っています。

できるならば、地形や植生から環境の変化を読み取ることが出来るように私も成長したいのです。勝れた友人のアドバイスを頂きながら……

(枝幸町在住)